



237 漫才師 昭和こいる

「はいはいはいはい」「へいへいはいはいほうほうほう」「よかったよかった」「しようがねえしようがねえ」。相方ののいるさんが何を言っても、終始一貫、適当に言葉を繰り返して受け流す芸風。たまらない味わいでした。

正月の演芸番組の常連であった漫才師、昭和のいる・こいるさんのボケ役、こいるさんが、12月30日に都内の病院で亡くなりました。享年77。死因は、前立腺がんとの発表です。

最後の舞台は、11月28日。こいるさんは、「最後の力を振り絞った。これが最後の漫才だろう」と周囲に語ったそうです。

前立腺がんは、男性だけにある前立腺に発生するがんです。欧米

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。



人に多いがんでしたが、近年日本人でも増加しており、現在、男性のがん罹患(りかん)率1位です(2018年統計)。その理由として高齢化と食生活の欧米化、そしてPSAという血液検査の普及が挙げられるでしょう。この検査により、初期症状がほとんどない前立腺がんの早期発見が可能とな

りました。早期で治療できれば、前立腺がんの10年生存率はほぼ100%です。PSA検査は50歳以上を対象に、自治体や人間ドックでも受けられる非常に便利ながん検査です。

一方で、後期高齢者になってからの前立腺がんには、進行が非常にゆっくりで寿命に影響を与えない、いわゆる「天寿がん」と呼ばれるタイプのももあります。ですから、75歳を過ぎてPSA検査で初期の前立腺がんが見つかった場合は、積極的な治療をしないほうが吉となることもままあるでしょう。

こいるさんの場合は、3年前に前立腺がんが発覚し、入院を繰り返していたとのこと。おそらくPSA検査による早期発見ではなく、かなり進行した状態だったのではと推測します。

どんなに生存率が高いがんでも、進行した状態で見つければ命にかかわるものとなります。しかし、「もっと早く見つけていたら」と悔やんでも仕方がありません。生存率は気になりますが、人間の致死率は100%。ちょっと遅いか早いかだけの話です。こいるさんの訃報を受けて、人気漫才師・ナイツの塙さんがTwitterで呟いていました。

「(漫才協会に)入会した時、無双状態でウケていた昭和のいる・こいる。もう一度見たかったけど、いっぱい見たしいっぱい笑ったし。そんなもんだよ、しようがない。師匠ありがとうございませう。ゆっくり休んでください」

塙さんのこの言葉に、「しようがねえしようがねえ」と天国で適当に頷いている、こいるさんの柔和な笑顔が重なります。

「しようがねえしようがねえ」と笑顔で見送ろう